

# 多言語社会におけるコミュニケーションモデルの一提案

中挾知延子<sup>†1</sup>

**概要:** 本報告では地理的や歴史的に複数の言語でコミュニケーションが行われている多言語社会を対象にしている。筆者は過去3年間、北アフリカチュニジアのマルサ市における中流階層の人々を対象に言語使用状況を調査してきた。そこでは、アラビア語チュニジア方言、フランス語、それらが混在するコードスイッチングが地域社会のさまざまな側面で常用されている多言語社会であり、人々は場面に応じて複数の言語を話す複言語話者である。調査で得られた300人の会話で用いる言語と、会話をする相手との間柄の関係を分析を行うとともにインタビューも実施した。得られた知見から、多言語社会におけるコミュニケーションモデルの構築を、西成のIMV理論、SperberとWilsonの関連性理論、そしてGouldの集団行動における友人間の協力モデルを基に試みた。

**キーワード:** 多言語コミュニケーション, コミュニケーションモデル, チュニジア, コードスイッチング

## A Proposal on Model of Communication in a Multilingual Society

CHIEKO NAKABASAMI<sup>†1</sup>

**Abstract:** This report focuses on local society where the local people are geographically and historically communicating with plural languages. El Marsa in Tunisia of North Africa was the target region of the field survey on language use of middle class inhabitants for the past three years. El Marsa is a multilingual society where Tunisian Arabic, French, and code-switching are usually used in various communication between the people. People in El Marsa can be said plurilingual, and the languages they choose depend on the situation. Language use data from 300 inhabitants was collected to analyze the correspondence between the language used and the terms with whom they are talking to, and also conducted interviews. Considering the findings from the survey, a communication model is proposed based on Nishinari's IMV theory, Sperber and Wilson's Relevance theory, and Gould's collaboration model among friends facing collective action.

**Keywords:** Multilingual Communication, Model of Communication, Tunisia, Code-switching

### 1. はじめに

筆者は2014年から3年間、北アフリカのチュニジア共和国にて人々がコミュニケーションをとる際に使用する言語についての現地調査を行ってきた。チュニジアは、正則アラビア語、アラビア語チュニジア方言(以下、チュニジア語)、フランス語が地域社会のさまざまな側面で常用されている多言語社会であり、人々は場面に応じて複数の言語を話す複言語話者である。

現地調査の場所として、マルサ(El Marsa)市を選んだ。マルサ市は、人口が約9万3千人で、チュニジアの首都チュニスから18キロほど離れた、いわゆる郊外の住宅地であり、比較的多くの中流階層が住んでいる。マルサ市において、300人の中流階層を中心とした住民に社会ネットワーク調査を行った。日常生活の多様な場面について、調査では仕事場や家庭などでどのような言語を使っているのかについてエゴネットワーク調査を行い、全部で3,002ペアのデータを集めた。会話をするペアをネットワークのノードとし、ノード間を結ぶエッジの属性を使われる言語とした。会話をする相手としては、社会ネットワーク調査でしばしば用

いられるネームジェネレータ方式を採用し、自身で5名の相手と言語を、仕事場・家庭・その他の場面に分けて指定してもらった。調査にはチュニス在住のカルタゴ大学教授や、大学院生とその友人の方々にも協力してもらった。

現地調査の結果、会話の相手と自身の間柄と、その会話で使う言語を用いてコレスポネンス分析を行った。調査では機会があればインタビューも行って、なぜそこでそのような言語を用いるのか、あるいは用いたのかについて意見を聞くことにした。調査で得られた知見について情報学の視点から、情報の送り手と受け手、そしてその間を行き来する多様な言語についてモデル化を試みた。本報告では、以前提案したGould[1]による集団行動における友人間の協力モデルをベースにしたコミュニケーションモデルが、本調査で得られた知見を反映させるように説明できることを示したものである。それにより、多言語社会ひいては多文化社会における人々のコミュニケーションの実態を、今後他の地域での調査結果と比べるとときに類似のモデル化を試みることで分類して、地域社会の多言語対応への方策に活かせるのではないかと期待できる。

### 2. 調査結果とコレスポネンス分析

現地で前述した調査を行い、表1に示すような集計が得られた。表1での言語の記号は以下のようになっている。

<sup>†1</sup> 東洋大学国際観光学部  
Department of International Tourism Management, Toyo University

TA: チュニジア語 CS:コードスイッチング  
FR:フランス語 EN:英語

ここでコードスイッチングとは、社会言語学分野で多く使われる用語で、会話において、文単位あるいは一文の中で2つ以上の言語を使う現象をいう。また、TA/FRのように二言語を“/”で結んでいる場合は、コードスイッチングのように会話の中で言語を切り替えるのではなく、A/Bは、「主にA言語を使うが、B言語も時々使う」ということを意味する。なお、すべての種類は33種類あったが、全体に占める割合が1%を上回っている6種類に絞って示しているため全体で2,872件になっている。表1のデータについて、コレスポネンス分析を行い、話者の間柄と使用言語の関係の付置を試みた。結果を図1に示す。

分析には株式会社社会情報サービスの「エクセル統計」[a]を使用した。コレスポネンス分析の結果、5つの軸が得られ、第1軸と第2軸で84.91%の寄与率であった。カイ二乗検定においても、第1軸と第2軸のみp値が0.001以下であり、統計的に有意であった。そこで、図2に示すように、第1軸(F1)と第2軸(F2)を用いた二次元空間に話者の間柄と使用言語を配置した。

表1 話者の間柄と使用言語の集計

間柄	TA	CS	TA/FR	FR	EN	FR/EN	合計
友人	248	142	58	48	17	11	524
同僚	148	127	39	44	6	8	372
上司	61	84	15	24	6	2	192
部下	68	59	6	8	1	0	142
顧客	43	75	18	20	9	5	170
教授	1	18	4	13	1	3	40
学生	5	7	2	9	2	0	25
両親	139	36	10	8	0	0	193
兄弟姉妹	145	41	34	6	0	2	228
配偶者	81	40	10	8	1	1	141
子供	85	46	10	11	0	0	152
他の親族	104	41	22	28	0	3	198
隣人	128	31	23	18	3	1	204
その他	181	46	31	26	7	0	291
合計	939	629	196	188	43	32	2,027

a) 株式会社社会情報サービス <https://bellcurve.jp/>

Symmetric plot (axes F1 and F2: 84.91%)

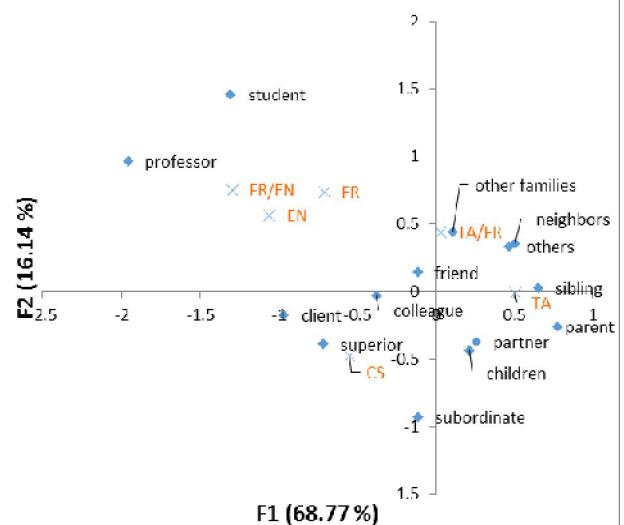


図1 コレスポネンス分析結果

図1の分析結果から、以下の2点を考察した。

- 第1軸は、いかに豊富な知識や情報のやりとりを表す情報性“informativeness”の軸といえる。professor(教授)とstudent(学生)は対象者がどちらの役割であっても、有用な知識を授受するということに変わりはない。その際に使う言語はフランス語や英語、あるいはその併用になっている。
- 第2軸は、非公式な社交“informal sociability”の軸といえる。対象者にとって親密さの大きい相手に対しては、チュニジア語やフランス語を用いる。ここで非公式という意味は、職場や学校における金銭や組織での利害関係がないということを想定している。

以上の点はある程度想定できることではあったが、調査をしていった過程で、予想以上にフランス語が人々の生活に浸透していることを感じた。第2軸にもあったように、友人間ではフランス語で話すという場合も少なからず見られた。また、家族という極めて親密な間柄の会話であっても、配偶者や子供に対してフランス語を話す機会が多い人も見られた。このことは中流階層の文化を反映しているのではないかと推測できる。

### 3. コミュニケーションモデルへの適用

2章で得られた多言語の状況を、送り手と受け手、その間を行き来する言語という視点からコミュニケーションのモデル化を試みた。既存のコミュニケーションモデルの一つに西成のIMV理論[2]がある。IMV理論では、メッセージには送り手の意図I(intention)があり、それを受け取る受け手にはその人の解釈V(view)がある。IとVの間を

行き来するのが M (message) であり、これら 3 つの要素 I・M・V の組で種々の組み合わせが考えられ、その中で誤解を生じるパタンを分析している。また、I・M・V 間の一致には、送り手と受け手の持つ頑固度 K や伝達度 T といったパラメータが考慮される。K が送り手や受け手に大きいほどメッセージは伝わりにくい。一方で、T が大きいほど、お互いに相手の立場や理解度に配慮したメッセージになっている。本研究では、IMV 理論におけるこれら頑固度 K と伝達度 T というパラメータを取り入れることにする。

K は、現地調査での知見から式(1)のように大小を付けることができる。K をここでは、「母語で会話できるにもかかわらず、エリート意識を保つために使う言語」という意味で大小を付けて式(1)とした。T は、「お互いに苦勞せずにメッセージを伝えられる言語」という意味で大小をつけて式(2)とした。

$$K : EN > FR/EN > FR > TA/FR > CS > TA \quad (1)$$

$$T : TA > CS > TA/FR > FR > FR/EN > EN \quad (2)$$

マルサ市の中流階層の人々はエリート意識の強いコミュニティを長年築いており、プライドが大変高い。近年アラブの春に見られるようにチュニジアには民主化の波が押し寄せ、一見良い方向に進みつつあるように思われるものの、様々な社会情勢から中流階層の人々の生活さえも悪化の一途をたどっている。それでも中流階層の人々はプライドを持ち続け、フランス語を流暢に話せることが一つの表れとなっている。彼らの多くはフランスへ短長期留学の経験があり、留学後チュニジアへ戻って官民組織での幹部職に就くという成功のシナリオを諦めるわけにはいかなのである。それはお互いの会話において共通の母語がチュニジア語であるにも拘らず、フランス語を使うという行動に表れ、またその会話を横で眺めている人たちに、自分たちはエリートなのだという示威行動にもなっている。さらに近年では英語が加わり、国際語ではトップの地位を持つ英語を話せることが、プライドの誇示と同時にグローバルなビジネスにおいても自分は有能なのだということを示すことになっている。

ここで微妙な位置になるのがコードスイッチング (CS) である。なぜ CS という形をとるのか、たしかに CS のような文単位や文中でフランス語や英語を一部混ぜるよりも、すべてフランス語や英語で会話をするのがよいのであるが、人々の言語熟達度が十分でないため、チュニジア語との CS になっている。また、CS は自身の洗練された教育や文化レベルを表現する道具になっている。そして職場では社会階層は必ずしも均一ではない。中流階層以下の人々にとっては、CS は自分より高い社会階層の同僚と会話を潤滑に行うという役割も持ち合わせている。さらに中流階層で

フランス語が流暢な夫婦は、自分たちの子供にもフランス語に幼少時から馴染ませておきたい気持ちが強く、CS という形をとることでフランス語を使って会話しておきたいという気持ちの表れにもなっている。最近では SNS の浸透によって、フランス語とともに英語でメッセージを送り合うということがとりわけ若者の間でさかんになりつつある。インタビューを通じて分かったことであるが、彼らにとって、フランス語や英語の単語でしかびったりと表現できない感情やことがらがあり、その時には CS を使うことが一番適切な方法ということであった。

次に、Wilson と Sperber の関連性理論[3]を適用して、「会話をする者同士はお互いによりよくメッセージの内容を理解してもらおうと努力つまり関連を強める言語を使う」とことについての関連度 R を導入する。関連性理論とは、メッセージの送り手は自分の意図することを理解してもらうのに、状況の許す限りもっとも効率のよい手がかりを話し、自分の意図することを受け手がうまく推論してくれるだろうと期待する。受け手はその発話がこの状況でもっとも適切に違いないという信念に基づいて推論する。この「効率のよい」ことを関連性理論では「関連性がある(高い) relevant」という。R を本研究に適用すると、式(3)で表す大小を付けることができる。つまり、チュニジア語よりもびったり来る単語や表現を混ぜた CS によって人々はよりよいコミュニケーションを取ろうとする。しかしながら、フランス語や英語が母語のチュニジア語よりも意思疎通を図れるかというとはそうではないと考えた。

$$R : CS > TA > TA/FR > FR > FR/EN > EN \quad (3)$$

ここで、以上の K・T・R を集団行動の研究において提案されている Gould の友人間の協力モデルを少し修正した以下の式(4)で記述した。式(4)は以前に中挾ら[4]によって、異なるステークホルダーへそれぞれに送るべきドキュメントの半自動判定に用いることを提案した論文で述べた。本研究では[4]で提案した式を少し修正したものである。

ここで話し手として s、聞き手として r とすると、話し手がメッセージを伝達する際に伴うメッセージの価値  $V_s$  を式(4)のように表すことにする。V は「多言語を用いたよりよいコミュニケーションをしようとする努力する指標」と考える。なお、聞き手についての値  $V_r$  は(1)で s と r を入れ替えた式になる。また、s と r は 0 または 1 の値をとり、s が 0 のとき話し手は聞き手にそのメッセージが聞き手にとって読んでも意味がない、つまり話し手は聞き手に役に立たないメッセージを送ることを示し、s が 1 のときは、話し手は聞き手にぜひともそのメッセージを理解してほしいことを示す。r が 0 または 1 のときも同様である。conf は、信頼値を示し、話し手と聞き手の間の信頼関係の強さやお互いの親密さを表す。λ はパラメータであり、話し手と聞

き手に応じて状況による重みづけに使っている。

$$V_s = ((T - K) \cdot s + (T + R \cdot s) \cdot r) \cdot \lambda_1 + \text{conf} \cdot s \cdot r \cdot \lambda_2$$

$$(0 \leq \lambda_1, \lambda_2 \leq 1) \quad (4)$$

式(4)における  $s$  と  $r$  の組み合わせによる解釈は[4]に述べられているのでここでは省くことにする。本研究では式(4)で  $s = 1$ ,  $r = 1$  の場合と考えて式(5)で  $V_s$  を表した。なぜなら、会話をしている時、話し手と聞き手はよりよいコミュニケーションを取りたいと考えながら最も適切な言語を用いていると考えたからである。ここで  $K$  が他と比べて非常に大きな値でない限り、 $T - K$  は正の値をとり、さらにそのメッセージの関連性が話し手と聞き手の両者にとって共有できる表現がより多ければ、よりよいコミュニケーションがとれることになる。なお、 $\lambda_1$  および  $\lambda_2$  は状況による重みづけのパラメータである。

$$V_s = (2T - K + R) \cdot \lambda_1 + \text{conf} \cdot \lambda_2 \quad (5)$$

ここで、 $\text{conf}$  は、信頼値を示し、話し手と聞き手の間の信頼関係の強さやお互いの親密さを表わすと述べた。本研究の場合では、会話をする相手との間柄によって親密さを計るとすれば、仕事場や家庭などの場面から分けた表1から分類すると以下のようなになる。

- 友人 = {友人}
- 仕事 = {同僚, 上司, 部下, 顧客}
- 家族 = {両親, 子供, 兄弟姉妹, 配偶者, 他の親族}
- 知り合い = {教授, 学生, 隣人}
- その他 = {その他}

これらの間柄によって  $\text{conf}$  の大小を決めるとすると、一般通念から式(6)のようなになる。

$$\text{conf: 家族} > \text{友人} > \text{仕事} > \text{知り合い} > \text{その他} \quad (6)$$

式(5)から、 $T$ ,  $K$ ,  $R$  が使用言語で、 $\text{conf}$  が会話をしている間柄で大小が付けられるとなるので、式(5)を変形して式(7)のようにする。

$$V_s - \text{conf} \cdot \lambda_2 = (2T - K + R) \cdot \lambda_1 \quad (7)$$

式(7)の左辺は、上述したように、「多言語を用いたよりよいコミュニケーションをしようと努力する指標」とすると、右辺にあるような使用言語の組み合わせで人は場面に応じて最適なコミュニケーションを図ろうとするときに、 $\text{conf}$  による間柄によって多少の調節がされると考えられる。すなわち、左辺では  $\text{conf}$  が大きいほど指標は減っていく。

これは、親密な間柄になればなるほどコミュニケーションをより多く取ろうとする努力が少ない、つまり以心伝心である程度通じるということを表していると考えられる。

#### 4. 今後の課題～多言語社会と経済効果

本稿では、チュニジアでの現地調査で集めたデータを基に、いくつかの既存研究からの成果を参考にしてコミュニケーションモデルの適用を試みた。社会言語学分野では、ある地域における使用言語の状況や言語接触 (language contact)、言語ヘゲモニー (language hegemony) など様々な現象について報告がなされてきている。従来の研究ではこれらの現象を調査して考察を加えるということが主流であり、集めた使用言語状況のデータを社会ネットワークの視点から分析したり、将来の言語使用状況の推定に役立てるといったことはあまり見られない。

一方で、言語多様性を国別で調べたグローバルな指標に Ethnolinguistic Fractionalization Index (ELF) [5]がある。ELFは1964年旧ソヴィエトで作成されたデータに基づくもので、後に Fearon や Laitin によって改良を加えられ[6][7]、また、Alesina らによって民族・言語・宗教の多様性指標として提案されている[8]。指標は、ある国の中でランダムに出会った2人の人間が異なる言語を話す確率を示したものである。いずれも経済学の視点から論じたものであり、民族や文化の多様性と経済効果の関係について、多様性が増加すればするほど、ソーシャルキャピタルの形成に支障を来すということを実証した研究である。これらの研究においては、ある地域社会において多言語が進めば進むほど、同じ言語を話す人同士においても溝が深まって団結意識が弱まる傾向があり、結果としてその社会全体の経済活動が弱体化していくと報告されている。また、土地活用の観点から、土地特性 (land quality) が似通った地域間では人々の移住や拡散は容易であり、すなわち同じ言語を話す人々が広がる一方で、土地特性が異なった地域間では人々の流入はあまり起きず、個々の土地を包括した広域で考えると、土地特性が多様化している地域ほど、多言語社会になっていくと述べられている。文化多様性の観点を地域開発計画に取り入れて役立てていくことは、その土地における生産性ひいては経済効果を考える上でも興味深い。

経済効果そのものを論じるのではないが、このような経済効果の観点から多言語社会とそこでのコミュニケーションの状況をモデル化していくことは、よりよい共生社会を考えていく上で極めて有用な示唆を与えると考えられる。たとえばある地域で使われている言語の状況を、いくつかの説明変数を用いて記述したり、経年データを測定して多言語の状況がどのように変化していくのかを推定していくことは、多言語社会の一諸相を表すことになる。そして、

その時に応じた多言語政策にも一つのヒントを与えることになる。説明変数として、社会階層を表す指標、年齢別人口、外国人就労人口、移民の流入・流出口、都市と農村部の人口、各種学校における外国人留学生や民族の割合などのデータを用いて分析することも1つの方法として考えられる。今後の課題として、多言語社会におけるコミュニケーションモデルの構築をさらに進め、有用性を研究していく予定である。

## 謝辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業 JSPS KAKENHI Grant Number JP26360027 「チュニジアの多言語社会におけるコミュニケーションネットワークの研究」 基盤研究(C) (一般)、期間 2014～2016 年の補助を受けて行われたものである。

## 参考文献

- [1] Gould, R. V. Why Do Networks Matter? Rationalist and Structuralist Interpretations. Diani and McAdam (eds.), *Social Movements and Networks: Relational Approaches to Collective Action* (Oxford), 2003, p. 233-257.
- [2] 西成活裕. 誤解学. 新潮社, 2014.
- [3] Sperber, D. and Wilson, D.. *Relevance – Communication and Cognition* 2nd eds., Blackwell Publishing, 1986.
- [4] 中挾 知延子, 野々山 秀文, 高橋 慈子. ドキュメントコミュニケーション分析へ向けてー地域包括支援ネットワークでのケーススタディー. 情報処理学会研究報告デジタルドキュメント(DD), 2015, 2015-DD-97(7), p. 1-4.
- [5] Bruck, S.I., and V.S. Apenchenko (eds.). *Atlas Narodov Mira* (Atlas of the People of the World). Moscow: Glavnoe Upravlenie Geodezii i Kartograi, 1964.
- [6] Fearon, J.. Ethnic Structure and Cultural Diversity by Country, *Journal of Economic Growth*, 8(2), 2003, p.195-222.
- [7] Fearon, J., Laitin, D.. Ethnicity, Insurgency and Civil War, *American Political Science Review*, 2002.
- [8] Alesina, A., Devleeschauwer, A., Easterly, W., Kurlat, S. and Wacziarg, R.. Fractionalization. *Journal of Economic Growth*, 8, 2003, p.155-194.